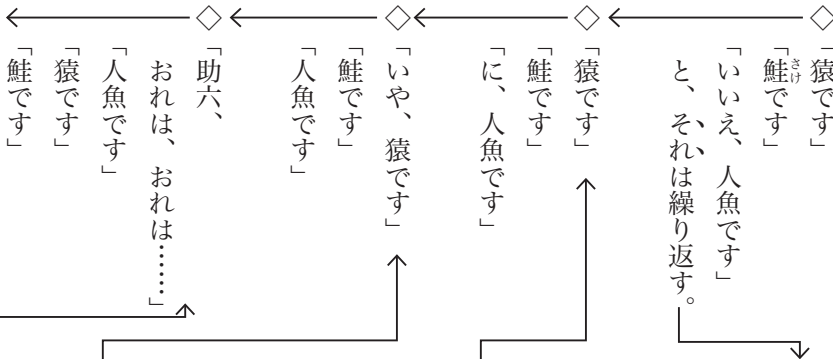


アイデンティティ

藤野可織 ふじの かおり

内容理解

この文章で作者は、助六の手により作られた「それ」が、人魚のミイラとして異国の博物館に飾られるまでを物語っている。本文を読み直しながら、空欄に入る適切な言葉を補ってみよう。



ここは、人魚¹だ。徹底的に干された猿と鮭は木綿糸で縫い合わされる。職人たちが、「ほら、人魚だ」「そら、人魚だ」とやっている。助六は、その首に縄をひっかけ、柿渋に沈める。引き上げられたそれは、首をくくった体のまま、天井から吊り下げられた。人魚たちは、ぽんとやられた途端に人魚の²に目覚める。吊るされた人魚の中でアイデンティティの³に困難をきたしているのはそれだけだ。掃除係に戻された助六がはたきでそれをつつく。

吊るされた人魚たちは、人魚たる自覚を深め、身は縮まり、顔は伝説の怪物にふさわしく、厳めしくおぞましく、⁴的なものへ変化した。泳ぎまわった記憶、人間に追い回された思い出。その肉が不老⁵の妙薬だからである。果実をしやぶり、ときには畑から作物を盗んだこと、あるいは、クマの爪を逃れ必死に川をさかのぼったことは思い出しもなかった。鉈^{なた}を振り上げられたときの恐怖も。そういうことで頭がいっぱいなのは、それだけだった。助六は、「人魚の死骸としての輝かしい未来」でそれを論ず。失望する助六、助六の失望は、それを⁶でぐしよ濡れにした。助六を呼び、それはあえぐ。

語句

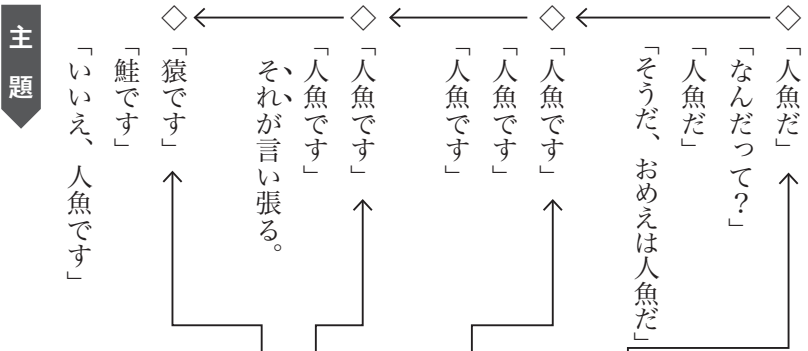
この文章の中で使われていた次の言葉を使って、短文を作ってみよう。

神妙 (三四八・下9)

駄目押し (三四九・下5)

丁重 (三五六・上20)

維持 (三五六・下7)



助六は、いちばんに「人魚」と口にした、その面倒をかいがいしくみるようになる。それには人魚の記憶は浮かばなかった。猿と鯉だった⁷ は薄れ、別の恐怖がそれを満たす。これでは不潔な死骸、ただの⁸ になってしまふ。出荷日、箱の蓋が閉められようとし、恐怖がしみ出す。

人魚たちとそれは船積みされ、揺れる船内でそれは自信を強めていく。それは樂しげに、誇らかに、厳かに、勇ましく、人魚の⁹ を上げ続ける。

目的地に到着、が発注者はすでに亡く、遠縁の者が引き取る。蓋を取ったマイルズは、「きみが何者であるかは、きみ自身が決めることじゃない」と言う。「きみは、人魚の死骸を装い、猿となにかの魚の死骸を糸でつないでつくられた工芸品だ」。五十年後、マイルズは死の床で、それを博物館に寄贈するという文書にサインした。

博物館の展示物として、それは人々を啓蒙する任を負う。¹⁰ を受け入れること。それが死骸であれゴミであれ、なんであれ」

主題

この作品で作者はどのようなことを描こうとしたと思われるか、次のことに着目して、百字程度でまとめてみよう。

〈着目点：「それ」の発する言葉〉

発展

次の中で興味を持った事項について、図書館の書籍やインターネットなどを使って調べてみよう。

- ・人魚伝説とは、どのようなものか。
- ・人魚の作り物とは、どのようなものか。
- ・江戸時代以降、日本から海外へ輸出されたものには、どのようなものがあるか。

100